

新聞と戦争

毎年大学の「ジャーナリズム史」の講義で、戦争とジャーナリズムは重要なテーマのひとつとして取り扱っている。受講者は主に二年次生、九・一一事件（二〇〇一年）、イラク戦争（二〇〇三年）ならまだしも、湾岸戦争（一九九一年）やベトナム戦争（一九七五年終結）となると、もはや彼ら彼女らの多くは生まれていない世代だ。教える側も「戦争を知らない」戦後生

「戦争を知らない」戦後生。マス・メディアと軍との協力文化、社会は南博『昭和文藝一九二五—一九四五』（勁草書房、一九八七年）などでもよく知られている。新聞メディアが新聞記事のみでなく、メディアイベントとして戦争遂行に協力したのは周知の事実である。

本書はそれよりはるか前の時代の戦争、すなわち大日本帝国がきまぬ時代にいたるあたり（一九三二年アイゼンハトとして戦争遂行満州事変）からその結末を迎える時（一九四五年終戦）までの検証である。それも研究者ではなく、その時代「龍児」であったマス・メディア、「新聞」社側から提示されたことの意味は重いだろう。

過去に本紙のマスコミ回顧でも紹介したように、本書を編んだ朝日新聞取材班は、「戦争責任」追悼（歴史上向き合う）、朝日新聞社（二〇〇六年）を、また

評価される。【第9章 満州開拓、第10章 南方への進出】

他方、いわゆる八月のジャーナリズムである原子爆弾の投下やポツダム宣言に関する経緯と新聞記事については、まだまだ十分ではないかという思いもぬくれない。本書のものである連載企画の提起は

満州事変から終戦までを検証

ジャーナリズムが目指すものとは何か

鈴木雄雅

№.2714
08/11/21 P.9



ご存じでしたか、読書人の本当の意味

- 一、趣味や生活の一部として書物を読む階層の人
一、(中国で)民間の学者や知識人の称

「広辞苑」より
● 本社への直接購読のおすすめ
お申込・見本請求は 購読係まで
TEL 03-3260-5791
FAX 03-3260-5507
郵便振替口座 00150-9-57070
1年50回11,500円/25回6,500円
10回2,600円

二次世界大戦や日中戦争、十五年戦争といった「限定的な」戦争の検証であるか。もし真正面から新聞と戦争（「新聞と戦争」と「ジャーナリズム」でないこと）に注意を、日本国という枠組みではあっても取り組むなら、明治期における（朝日新聞が日清戦争（八四一九五年）、日露戦争（一九〇四—〇五年）そして第一次世界大戦で、朝日新聞と国家がどう対立と妥協があったかも検証しなければならぬ）、それを明らかにすることも避けてはおれない道ではないだろうか。

井上ひさし氏が「過去の自らの活動を、驚くほど厳しく自己点検している。引き続き勇気をふるって、自己点検を続けて欲しい」（推薦文）という言葉の重さをかみ締めて欲しい。
実は既に本書の起点である満州事変よりもはるか以前に新聞は戦争を「止められない状態」に陥っていたのではなかったのか。
「戦争協力への道に深入りする手前で踏みとどまれば、たかもしれない最後の分岐点」

「なぜ新聞は戦争を止められず、逆に戦争協力の深みには突いていったのか（五六七頁）だった。それが「過去の負の歴史に真っ正面から向き合う……」といふくだりになるや、いさゝか疑念がわいて来る。
なぜならば、本書は正確に言えば、太平洋戦争（第一



46判・591頁・2415円
朝日新聞出版
978-4-02-250442-5